

12月13日「父の苦悩」マタイ福音書1：18～25

11月に乳児の死体遺棄事件が立て続けに起こりました。2020年だけで調べてみても、うんざりするくらい沢山出てきて、悲しい気持ちになります。そのうちの1つは当時女子大生だった22歳の女性が空港のトイレで子どもを出産し、命を奪って近くの公園に埋めてしまったらしい。「なんて酷いことを！」私もそう思います。「命をなんだと思っているのか!？」本当にそうですね。あまりに命を軽視している、そう思わざるを得ません。けれども、私の心の片隅でひっかかることが一つあるんです。「子どもは一人では産まれないはず・・・」そうでしょうか？必ず相手の男性が居たはずなのに、なぜ女性の責任ばかり問われるのでしょうか？

今日はマタイによる福音書から、同じような危機に見舞われた女性の「夫」の話を聴きました。そう、父ヨセフです。私たちは受胎告知というとおとめマリアと天使ガブリエルを思い浮かべます。聖霊による妊娠の発覚、思いがけないお告げを“Let it be”「お言葉通り、この身になりますように」そう受け入れた神に従順な美しい女性の物語です。けれども、この物語が成立するためにはこの女性とお腹の子を守り助ける存在が不可欠でした。なぜなら、律法の規定に従えば、マリアは死刑となってもおかしくなかったからです。

マリアは婚約中の身であったにも関わらず、結婚する前に身ごもっていることが分かりました。当時は結婚前に一年間の婚約期間を置くことが通例だったらしく、それは結婚と同義の状態でした。この期間にもし、夫以外の者と関係をもったということであれば、姦通の罪を犯したことになります、石打ちの刑となったのです。私たちのために与えられた救い主はこの世に命を受けたと同時に命の危機にさらされたのでした！夫ヨセフは悩んだことでしょう。マリアは身ごもったというが、自分には覚えがない。裏切られたのだろうか。もう噂は村中に広まってしまって、隠し通すことは出来ない・・・聖書は言います。「**夫ヨセフは正しい人であったので、マリアのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心した**」この言葉に2通りの解釈がなされています。1つは単純にマリアと縁を切り見捨てようとした。その場合、マリアとお腹の子に待っていたのは石打ちで

した。1 つは、マリアを庇うために婚約を解消しようとしたという解釈。そうすれば、姦通の罪ではなく、未婚の母となり、死罪は免れるのです。どちらにせよ、それらは「正しい」選択でした。律法の規定に則り、自分には何の害も及ばない、出来れば、相手にも規則の範囲の中で助かる選択肢を与えるものでした。それは間違いなく「正しい」選択でした。

ところが、そんな「正しさ」を求めようとしたヨセフのところに神からの働きかけがありました。天使がヨセフの夢の中に現れて告げたのです。「**ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。**」もうマリアとは縁を切ろう、そんなヨセフの正しい決意は神によってひっくり返されました。ヨセフは妊娠した妻と子を自分の愛する家族として迎え入れるという一番愚かな選択をすることにしたのです。それは「あいつは妻に浮気されているのに気づかない、上手く言いくるめられて騙された愚か者だ」ずっとそんな陰口をたたかれ続ける道でした。彼は正しい人間だったのに、神のために、救い主のために、そして妻のために、一番間違った愚かな選択をすることにしたのです。けれども、それは愛に溢れた最高の道でもありました。このヨセフによって救い主イエスと母マリアは守られたのです。

保育園で働いていると、時々、規則の中でどうしても子どもや保護者にとって最善ではないと思える仕方を取らざるを得ない場合があります。在籍している保護者も子も保育園に居続けることを望んでいるのに、保護者の就労状況や家庭の状況によっては、退園してもらわなければならないことがあるのです。規則に従うことにはそういう面があり、保護者から窮状を訴えられることがあります。本当に胸が痛みます。

冒頭の、自分の赤ちゃんを育てられなかった女性、事件の概要だけを聴いていたらとんでもない女性です。もちろん法で裁かれなければならない女性です。けれども、丁寧に報道を追ってみると色々なことが分かります。就職活動で否定的な言葉ばかりかけられていたこと。学費などで家族には大きな金銭的な負担をかけていて、これ以上迷惑をかけられないと追い詰められていたこと。公園の監視カメラには涙を流しながら何度も公園を出

入りする様子が映っていたこと。日本では乳児遺棄事件が後を絶ちません。その理由の根本には、法律に欠陥があることを専門家や支援団体は指摘しています。望まぬ妊娠をした女性を助ける制度が日本にはほとんどないのです。ある NPO 団体には毎年 400 件もの相談が寄せられるそうです。「家庭環境が複雑で家族に頼ることが出来ない」「妊娠を知ったとたん相手の男性が逃げてしまった」「同意していない相手との間に子どもが出来てしまった」「お金がなく、病院にも行けていない」相談を寄せる女性たちは皆、産婦人科医や周りからは厳しい言葉を投げかけられたと言います。『自分で産むんだから何とかしなさい』『誰かに育ててもらおうのはおかしい』そんな批判をされ、本当にひとりぼっちだと思ったと。周囲の人は誰も間違ったことを言うてはいませんが、しかし、正しさが暴力となり人を追い詰めることがあるのです。

私は正しさが必要ないと言っているわけではありません。むしろ正義を求めています。特に私たちの国は、元首相が法律を犯して、不当に選挙人を買収していた疑惑もあります。社会の中に正義が行われるように私は祈っています。けれども同時に「正しさ」が私たちを分断することがあることを私たちは知っていなければなりません。法に従えば、規則に従えば、一般常識に則れば、そういつて、私たちは他人を見限り、縁を切り、その人との関りをなかつたことにしようとするところがある。そうやって自己責任によって分断された「無縁社会」の中で、傷つき、助けを求められず、追い詰められている人がたくさんいることも知らなければなりません。追い詰められた者にとって単純な「正しさ」は暴力となることを知らなければならぬのです。法律は人間の作ったものです。人間の作ったものですから完ぺきではなく、その想定を外れた出来事が起こることがあり得ます。私たちの救い主も聖霊によって身ごもるといふ、まったく私たちの想定からは外れた仕方での世界にやってきたのです！この世界の法律は救い主を守ってくれませんでした。神が与えられたはずの律法すらも守ってくれませんでした。救い主と母親を守ったのは、自分が愚か者となることを厭わなかつた、大工の男が見せた精一杯の愛だったのです。

そんなヨセフの子として育てられたイエスの働きを考えてみます。罪人

や異邦人、汚れた人たちと友達になり、病や障害によって見捨てられた人を癒し、最後にはすべての人の罪のためにご自身の命を捨てたのです。パウロはこう評価しています。ローマ5：6～8「**実にキリストは、わたしたちがまだ弱かったころ、定められた時に、不信心な者のために死んでくださった。正しい人のために死ぬ者はほとんどいません。善い人のために命を惜しまない者ならいるかもしれません。しかし、わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださったことにより、神はわたしたちに対する愛を示されました。**」善人のためになら、命を捨てる人はギリギリいるかもしれません。でも罪人のために命を捨てる人なんているのでしょうか！？こんな愚かなことがあるのでしょうか！？けれども、救い主はそれをしてくれたのです！今日の物語は、その父もまた、正しい道ではなく、愚かな道を歩んだことを伝えます。愚かだと陰口を叩かれ、罵られる道を選んだのです。まさにこの父にしてこの子あり。この二人は血では繋がっていないかもしれません。けれども、神の愛によって、聖霊によって結び合わされた確かな親子だったのです。

先日、祈祷会の準備をしていたら1本の電話がありました。「ホームページを見て連絡したのですが、そちらの教会は、子ども連れでも受け入れてくれますか。小学生の子どもを育てるのが本当に辛いのです。」もちろん簡単なのは最寄りの子育て支援施設や行政の窓口を紹介することだったでしょう。けれども私は思わず答えました。「毎週日曜日9時から子どもの教会をしています。附属の保育園もあります。同世代の子どもたちも集っています。現役の保育士の教会員もいます。いつでも来てください。」結局、その方は来られることはなかったのです。今でも、連絡先を、せめて名前だけでも聞いておけばよかったと後悔しています。

コロナ禍もあり、困難な人たちが溢れる時代となりました。今、私たち教会も問われています。あなたは愚か者になれるか？世間的に、一般常識的に「正しい」道ばかりが選択肢ではないはずです。私たちの教会は、今、様々な窮状を抱えた方の大きな助けとなれる可能性をたくさん秘めています。単純な「正しさ」よりも愛ある道を選んでいきたい。それは父ヨセフが、そして救い主イエスが歩かれた道なのです。